

主題	左半側空間無視の困難を緩和する取り組みと効果について
副題	Neuropsychology で考える環境整備と日常ケア

左半側空間無視	神経心理学的アプローチ	研究期間	12ヶ月
---------	-------------	------	------

事業所	社会福祉法人徳心会 特別養護老人ホームいずみえん		
発表者：佐々木真望（ささきまみ）	アドバイザー：小寺義成（こでらよしなり）		
共同研究者：佐藤健太（さとうけんた）			

電話	03-3759-5550	E-mail	kaigo@tokushinkai.jp
FAX	03-3759-5634	URL	http://tokushinkai.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	大田区にある福祉施設で、平成16年8月の開園です。老人福祉サービスと障害福祉サービスを提供する複合施設であり、特別養護老人ホームにはショートステイ利用者を含む160名（個室38室、4人部屋28室）、デイサービス40名となっています。障害者支援施設はショートステイを含め54名です。尚、今回発表の対象は特別養護老人ホームになります。
------------------	---

### 《1. 研究前の状況と課題》

当施設は開園より10年が経過し、利用者の年齢・重症度共に上昇している。障害像は様々だが、最も多い既往は脳血管障害である。介助の必要性も様々で、生活全般に介助を要する利用者から、自立度の高い利用者まで千差万別である。それぞれに何かしらの問題点を抱えているが、中でも比較的自立度の高い利用者の問題点は気づかれにくい。しかし、細かく観察すると車椅子は自操できるが、接触させてしまう。片側に注意が向きにくく、更衣や食事が拙劣になる等、半側空間無視の症状と思われる問題が見られた。また、それによる利用者同士の諍いも見られたため、半側空間無視を呈した利用者への対応策を立てることが当施設の課題となっていた。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

本研究の目標は半側空間無視を呈した利用者の症状の改善であった。しかし、田川氏は慢性期に半側空間無視が残存した場合、症状の完全な消失は難しいと述べている。<sup>1)</sup> その為、根本的な改善に囚われず、注意や意識を無視側に向けることができるような状況を作り出すことも目的となった。これらによって利用者同士の諍いや、注意が向きにくいことによる行動の拙劣さが齎しえるストレスを軽減させることが出来るのではないかと考えた。また、基本的に当施設ではほぼ全利用者が慢性期である。症状の改善に向けたアプローチも過剰になれば対象となる利用者のストレスになりうる。この点を踏まえ利用者の様子を観察し、取り組みが職員本位にならないような注意が必要と考えられた。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

対象となる利用者は、Catherine Bergego Scale の日本語版：ADLの無視スケールにおいて<sup>2)</sup>、半側空間無視が疑われた利用者であった。その結果の総数23人、全利用者中の15%であった。なお、対象となった利用者は全て左半側空間無視の症状であり、文献には右麻痺で右半側空間無視もありうる<sup>3)</sup>とあるが、今回の対象者には含まれなかった。具体的な取り組みとしては、最初に知能などの全般的問題に対するスクリーニングとして mini-mental state examination(以下 MMSE と略す)を実施。点数が15点以上の利用者18人に対して線分2等分検査・線分末梢・図形模写を行った。<sup>1)</sup> その結果、15人に左半側空間無視が確認された。

改善に向けたアプローチとしては、対象となる利用者に、左を意識するような声掛けから開始した。しかし、あまりにも「左、左」と直接的な声掛けは利用者の苦痛となり得る為、やさしい声掛けと左側に注意が向いていない事を理解してもらうような説明を行った。それ以外では、環境からのアプローチとして、テイルームの席の変更を行った。テレビやスピーカーをあえて左に設置し、左側への注意を促した。また、車椅子自乗中は職員が車椅子の左前を並走しながら話すことにより注意を促した。ただし、あまりにも利用者の様子からあまりにも苦痛と思われた場合はそれらのアプローチを中止した。

### 《4. 取り組みの結果と考察》

取り組みの結果、9人の利用者が日常生活での車椅子の接触や左側の食事の食べ残し、髭の剃り残し減少させる事が出来た。しかし、外出時や行事など非日常的な場面では半側空間無視によると思われる症状が度々確認された。この事から半側空間無行為が改善したのではなく、日常生活において注意を左側に向けることが般化された結果であると思われた。

### 《5. まとめ、結論》

今回の研究を通し、左半側空間無視は完全に治癒することは不可能でも病識の促進や注意を方向付けることによって対症的な改善が見られることが確認された。また、Ishiai氏は半側空間無視は言語性IQにより代償することが可能と述べている。<sup>4)</sup> これはMMSEの結果によって半側空間無視の評価の可否に一致する。般化と代償で改善された症状であるからこそ、施設内の状態で安心せず、非日常的な場面では特に注意を払う事が重要である。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に写真などの取り扱いについて口頭と書面によって確認をし、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

- 1) 田川皓一：神経心理学評価ハンドブック、西村書店、2004
- 2) 菅原光晴 前田眞治：左半側空間無視患者における認知リハビリテーションの有効性、高次脳研究 Vol30,2010
- 3) 小寺富子：言語聴覚療法臨床マニュアル、協同医書出版社、2006
- 4) Ishiai S Sugishita M, et al : Clock-drawing test and unilateral neglect Neurology 43,1993

### 《8. 提案と発信》

福祉業界も日進月歩で専門性を確立しています。利用者の小さな変化を見逃さず、常にエビデンスに裏打ちされた対応を行うだけでなく、新しいものを作り出す力も必要ではないかと思います。今後更なる研究を通じ、利用者や地域に貢献する施設でありたいと思います。

【メモ欄】